

タイトルからして挑戦的だが、博物館での正しい過ごし方など勿論ない。

走らない、大声を出さないなど、パブリックスペースでのルールを守れば、それぞれの事情に応じて思い思いに過ごせば良いのである。

2年前、私用で訪れた東京の美術館でオランダ「マウリッツハイス美術館展」が開催されていた。入館者のほとんどの目当ては、フェルメール作「真珠の耳飾りの少女」。

絵の前には長蛇の列。人々は食い入るように絵を眺め、ため息をつきながら移動する。

(この絵だけは閲覧時間制限がありました。)縦横40センチメートル足らずの絵中の少女の眼差し、何かに怯えるような憂いをたたえながら、確かに見る人の心を捕らえて放さない。他の”巨匠”の絵画も少なからず展示されていたが、人々は「目的」を達成したかの如く、他の絵の前は停止時間数秒で通り過ぎていく。

本館に来館される方々も、一つ一つ展示の解説を見ながら丁寧に見られる方、時間が限られているのであろう、早足で一通り回り、さあ次へ、という方、グループで来られ、展示よりも談笑が楽しげな方々等々、様々である。いずれも本館に興味をもち、来館いただいたことは大変ありがたいことです。

しかし、ここで博物館の過ごし方の一つとして提案したいのは、まず一人で見ていただきたいということ。そして、お気に入りの展示を見つけてほしい、ということである。

哲学者三木清は、自筆『哲学ノート』の中で、「孤独は山にはなく、むしろ町にある」と述べている。孤独とは周囲と関連・連絡・接触がない状態であり、それは幽山でも都会の人ごみの中でも起こりうる自覚的なものということか。逆手に取れば、孤独は、だれにも邪魔されずに自分の思考の世界に浸ることができる状態である。そのためにはとにかく一人になって自分のペースづくりが大切である。本館では「孤独」を楽しんでほしい。

「鑑賞」とは、「芸術作品などの美的な対象を、視覚あるいは聴覚を通して自己の中に受け入れ、深く味わうこと」との意がある。展示物は、土塊から出てきた単なる物ではなく、古代人の美意識や創造性の結晶である。そして展示に至るまでに、数多くの人々が関わった調査研究、復旧整備の結晶である。それらを鑑賞していただきたい。本館には展示物への一つ一つの丁寧なキャプションはなく、まず物自体を直視できる状態にある。博物館は「静」の世界である。展示物はあなたに何も語りかけはしない。まずはあなたが展示物に対して関心の電波を放ち、跳ね返ってくるものを感じてほしい。すぐにピン、と来るかもしれない、時間がかかるかもしれない、何も感じないかもしれない。跳ね返ってくる物を時間をかけて探していただきたい。

展示物への関心が強まり、その素性を知りたくなったら、最寄にあるキャプションシートや研究室棟を利用するとよい。



なにより、本館は入場無料である。時間が許す限り何回でも来館し、”贅沢な”過ごし方をしてみてはいかがだろうか？

(岡崎 裕也)